会議議事録

|  |  |
| --- | --- |
| 事業名 | 令和3年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」（２）教職員の資質能力向上の推進①効果的な教育成果②教職員研修プログラムの構築 |
| 代表校 | 一般社団法人全国専門学校教育研究会 |

|  |  |
| --- | --- |
| 会議名 | 第5回学習評価WG |
| 開催日時 | 令和4年2月16日（水）　10時00分～12時00分 |
| 場所 | 福岡リファレンス駅東会議室（オンライン開催併用） |
| 出席者 | 事業責任者：高岡　信吾委　　　員：植上　一希、上里　政光、岡村　慎一、近藤　賢宏、丹田　桂太、（オンライン参加）小田　茜、岩﨑　千鶴、田澤　初美、佐藤　昭宏 　　計10名オブザーバー：内川　穣太　　　　　　　　　　　　　　　　　 計1名請負業者：飯塚　正成　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　計1名　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合計12名 |
| 議題等 | 1. 今回のWGの目的について（植上）

(1)今年度の事業のまとめ・今年度は沖縄と岡山で研修プログラムを実施し、その研修プログラムを開発することを大きな目標としてアクションリサーチをしてきた。コロナの影響もあってリサーチの数も減り、研修自体も実際は実施できなかったが、そうした中でも先生方のご協力により、数は少なかったが、質の高い調査ができた。アクションリサーチについてはすべて先生方の確認を受けたテープ起こしをすでにデータ化している。１つの成果物として、その整理したものを文科省の方に報告書という形で提出する予定。(2) 非認知に関する研修プログラムの開発について・検証の実施はできていないが、実施予定の研修プログラムをパワーポイントで1時間目と2時間目の分を作成、そちらをslackの方にあげている。今後先生方のご確認の上、文科省の方に提出したいと考えている。予定と若干ズレはあるが、ほぼほぼ計画していた成果物については出せる予定。(3)研修プログラムについて・作成した研修プログラムについてご意見等をいただきたい。実証については沖縄と岡山で1月に2回研修プログラムを実施し、アンケート結果、先生方のご意見を踏まえて改善を測る予定だったが、それが叶わなかった。こちらについては次年度6～8月頃に改めて実証講座を実施する予定。・資料を基に1時間目と2時間目のプログラム説明。【意見等：1時間目について】・ボリューム的に50分で足りるかと感じるが、良くまとまっており分かりやすいため問題はない。（近藤・田澤・岩﨑）・1点目、LiveQの使用方法について講義中にUPされた質問にする回答のタイミングはいつになるのか。（高岡）→現在ワークの時間を3回設定している。意見を送っていただく時間を設定し、それを見ながら回答する流れを想定している。ただ研修を受ける先生方がLiveQ対応可能なのかどうか検討する必要があるので、試験的な実施も検討する。（植上）→LiveQに関しての設定や操作、講義を進める中での問題点をあげ、検討や実証開催校で使用できるか実証をしていく必要がある。（飯塚）・1時間目は動機付けの部分だと思うが、専門学校の教員は非認知能力を意識してはいないが、授業などの指導の中でそこに注目して学生を育てている部分もある。今は無意識の部分だが、実は普段からやっていることですよという、学問的に捉えることもないが、意識するとさらに効果が出るというような提案の仕方も一つの方法では。また、紹介したいという本は、比較的対象が低い年齢を意識したものが多い。私は効果があると思うが、青年期からやることに本当に効果があるのかとかという疑問を持つ人もいると思う。なので、青年期から始めても十分効果はあることを紹介できるとインパクト強くなる。（高岡）→同意。言葉として出るような意識付けをしてほしい。（岡村・上里）→青年期からでも効果があること、また非認知能力に関する教育は、意識はしていないが普段先生がやっていることだということを認識していただく内容を付け加えていきたい。（植上）【意見等：2時間目について】・職業専門的や社会人基礎的という言葉について、まずその言葉について紹介すると、言葉をイメージしながら研修に入っていけるかと感じた。また、1時間目の研修で焦点を当てる強みで、職業を目的とした教育学習とか職業を手段とした教育学習をするとあったので、この2時間目の研修プログラムでワークを重ねて非認知能力が理解でき始めた時に、グッドプラクティスや、「最も重要だと思われる非認知能力は何だろう」と話をする場面で、成果が出た要因を話し合うと効果的になるかと考えた。例えば商業実務専門課程に入学したが、外的要因で目標業界に進めなくても、違う業界で活躍できているのはこのような非認知能力がその活躍の要因だと言えるようになるのも重要と考えるので、研修の中で触れられると良い。（近藤）→一点目については、職業専門的・社会人基礎的という言葉が議論する中でもかなり難しいという話になったので、具体例を示しながら話をする必要があると考えている。研修を受ける先生方に抵抗感が出ないようにしたいと考えている。また、二点目についても、「社会人基礎的」では、専門的な力ばかりでなくても社会人的に基礎的な力が身についている事の意味、非認知能力と言われている能力の有用性の話につながるが、例えば学科が想定している仕事に直接的ではなくても多面的な領域でも活躍をしていけるような事例の話もできればと考えている。これは実際ワークかスライドの中のどちらかで具体的に示していきたい。（丹田）・やはりこの職業専門的という非認知能力の話と社会人基礎力的の部分で分けているところが研修の構造としては複雑化する難しいところ。スライドP19のオレンジの部分はすべて同じ大きさにしないと、今までのWG等で議論した、専門学校として“職業人として身につけてほしい力”は等しく身につけるということとずれが出てくる。ただ教育のスタート地点では、子供によって備わっている非認知能力のベースがそれぞれ違うという話もあった。その社会やリ現実的に職業の課題と向き合う中で、結果的に下の部分も伸びていくという教育効果について分かりやすくするためにも、上のオレンジは揃えた方がいい。この内容を分かりやすく説明することが、後半のワークのポイントにもなる。この部分については高岡先生がおっしゃっていた社会人の非認知能力の育成などの話とも関わってくる。もう１つは、スライドP23の応用例は、埋まっているほうが良い。（佐藤）→おっしゃる通り、複数の要素が絡んだ図になっているので改善したい。また近藤先生がおっしゃってくれたこと、また佐藤さんとの指摘も関係するが、事例紹介をする前の段階で作業手順を明確化していかないと、事例紹介の意図が伝わりにくい。大事なのはスライドP24で事例のまとめ。この手順をある程度先生方に事前に落としていく。さらに必要な幾つかの用語の確認、特に社会的基礎力と職業専門的な力についての確認をした上で、事例紹介で理解を深める流れを作る工夫をしたい。(植上)→佐藤さんの話を聞いて、教師として学生に「今までの自分」→「これからの勉強」→「学習後のイメージ像」をイメージさせることが必要。取り組む姿勢で学習後の能力が変わる。要はあのオレンジの部分が入学してからの学習成果とすると、自分次第で社会人になった時の自分の大きな強みになるという風に繋げられると良いかと考えた。(高岡)→ここでは多様な学生の能力の把握という観点からスタートした図になっている。高岡先生の今のお話との関係でみると、職業世界もしくは学校が設定する非認知能力の目標のようなものがあり、それと入学時点の学生との比較が一個絡めることが重要。つまり職業世界に必要とされる非認知能力の幾つかのバリエーションと入学時点の学生の差異を測るイラストがある上で、多様な学生の多様な能力の把握の仕方のイラストがあると、その二つの段階が分かりやすくなると感じる。→ここで何を示そうとしているのか、教師がイメージしやすい＝教師が学生にイメージさせやすいことが重要。必要な習得要素が学問的な知識だけではなく非認知能力部分も明確に示して、勉強が苦手な学生には人間力や人間性を磨くことによって卒業後より活躍することを期待していると思う。自分が勉強したことをそのまま就職に活かすことができない学生が別の分野でどう自分を活かすのかといった時は必ずそういう部分が必要になる。この部分が専門学校では大変重要な部分なので、何を表そうとしているのか、明確に伝えられると良い。(高岡)→イラスト化は難しいかもしれないが、高岡先生から頂いたご意見を言葉でもいいから入れ込んでいく。事例紹介に時間をかけることは必要。アクションリサーチでこういうような発見とかこういうような意義づけがあったということを紹介すること自体がこの事例検討の意味だと考える。(植上)→これは学校側、提供する側のべクトルと学生側のベクトルの視点から見たときのものとして話をされていると思うので　学校側からすると「あるべき姿」としてDPというゴール設定があり、それに伴うカリキュラムポリシーとしてこのようなカリキュラムで職業的な能力や基礎的な能力、またビジネスマナーなどを習得し、あるべき姿のモデルがある。だけど我々専門学校では個別多様性に対応するためにそれぞれの学生に合わせた到達目標の設定、教育をしていく。そのような教育方針を伝えられれば良いと感じる。ただし気を付けるべきはDPに到達しない学生もいて、そういう場合でも卒業できるという現実がある。これをどう表現するかがデリケートな問題かなと考える。(岡村)→専門的なちゃんと身につけるべき知識や非認知能力も含め、そのゴールは前提としたイメージで作成を進めたので、おっしゃった通りその二軸を意識して見せ方を考えたい。(佐藤)→数値化できる認知能力はある程度その到達目標のレベルを合わせるというのが専門学校でも職業教育としてあるだろう。こういう資格取らなくてはいけない、ここはこれだけ点数とらないといけないとか。でも非認知能力は数値化できないものだから、あくまでもそれを人それぞれの成長度に合わせて私たちは育成をしていきますというスタンスで「伸び」に着目している。数値化できない非認知能力での到達目標を、どういう表現で設定するのかが今後の課題になるのでは。(岡村)1. 今後のスケジュールについて（植上）

・6月～8月…検証実施、その後1時間目・2時間目に関しては完成版作成。・7月～8月…第1回WG開催・残りのプログラムは4ヶ月ぐらいかけて作成する予定。 |
| 配布資料 | ・研修プログラム（1時間目）・研修プログラム（2時間目） |

以上